

院生は学外の臨床心理実習で何を学んでいるか —教育臨床領域における実習の振り返りから—

What students learn from internship programs in adjustment
guidance classes

友 清 由希子

岩 橋 知 子

Yukiko TOMOKIYO

Tomoko IWAHASHI

(福岡教育大学 学校教育講座) (福岡教育大学 保健管理センター)

(平成19年10月1日受理)

抄録

臨床心理士を目指す大学院生が学外の教育臨床領域における臨床心理実習でどのように臨床心理学的援助の実際を学んでいるか探索的に面接調査を行った。その結果, 主に「場の理解」, 「子ども理解の広がり」と深まり, 「臨床心理学的援助の実際」, 「臨床心理士の専門性」について体験的な理解を深めていることが明らかになった。

I 問題と目的

臨床心理士を養成する臨床心理士資格認定協会の指定大学院では修士課程の2年間を通じ臨床心理基礎実習, 臨床心理実習などの実習科目(以下, 臨床心理実習とする)が必修カリキュラムとして位置づけられている(心理臨床学会, 2001; 日本臨床心理士資格認定協会, 2006)。

履修期間	修士1年前期	修士1年後期	修士2年前期	修士2年後期
理論的科目群	臨床心理学特論, 臨床心理面接特論, 臨床心理査定演習などの専門科目群			
往還的理解				
実習科目群	臨床心理基礎実習A, 臨床心理基礎実習B, 臨床心理実習A, 臨床心理実習B			
実習機関	本学附属相談室, 医療機関, 福祉機関, 教育臨床機関など			

図1 臨床心理学実習の位置づけ

臨床心理実習は図1に示すように, 教員養成課程における教科に関する科目, 教職に関する科目などに相当する専門的な科目と並行して履修していくモデルである。

臨床心理士の養成が, 理論を学んでから実習をとという流れにはなっていないことの意味を確認しておきたい。

一つ目には臨床心理士の業務は何らかの技法や検査道具を用いることはあるにせよ, 臨床心理士自身を用いて行うものである。従って理論を学ぶだけではなく, 実際にそれを「自分自身が」用いていくということについて体験し, 援助対象者との間にどのような相互作用があるのかを体験的に学ぶ必要があると考えられる。

二つ目には臨床心理士志望者が現実の職業モデルを持っているとは限らない現状がある。教職志望者の場合はそれまでに受けた十年以上の学校教育の中で教師から指導を受けてきている。志望動機には良き師との出会いや, 身近な人物が教師であることの影響を受けることがあるだろう。しかし, 臨床心理士の場合, 誰の回りにも身近に臨床心理士が存在するというほど普及している職業ではない。加えて, 臨床心理士が働く

場は「医療・保健」「司法・法務警察」「産業・労働」「教育」「福祉」など大きく8領域に分けられる（日本臨床心理士会，2006）。さらに臨床心理業務は4種に分けられる。すなわち「臨床心理面接」「臨床心理アセスメント」「臨床心理地域援助」「臨床心理研究」である。これらの業務は領域に限らず共通する部分も大きいと考えられるが、それぞれの重み付けや援助目標の違いはあると思われる。そのような現実に触れ、改めて職業としての臨床心理士を目指すのかどうかということについて吟味する必要があると考えられる。

本学は第2種指定校であるが、附属相談室を設置しており、院生はケースの陪席、担当、ケースカンファレンスへの参加、担当したケースのスーパーヴィジョンを受ける経験をしている。加えて、学外の医療機関、福祉機関、教育臨床機関などの協力を得て、できる限り複数の領域での実習体験を積めるように運営に努めているところである。

では、院生は学外の臨床心理実習でどのようなことを学んでいるのであろうか。例えば、教育実習であれば、実習校で教師の授業を見る、子どもたちと毎日を共に過ごす中で遊んだり、子どもを指導したりする、授業の指導案を作成し実際に授業を行う、それについて教師の指導を受けるなど、どの学校で実習をしようともある程度実習の内容が共通している。しかし、臨床心理実習の場合は実習協力機関によって実習内容が異なっているのが実情であろう。

例えば、一口に医療機関と述べても、臨床心理士が集団療法を中心に行っている病院もあれば、心理検査と個人面接を中心に行っている病院もある。援助対象となる人々もほとんどが成人の患者である病院もあれば、発達障害の子どもの支援を中心に行っている病院もある。まして、実習協力機関が複数の領域にわたっていれば、臨床心理士の従事する職務内容や立場は大きく異なっている。このため、学外における臨床心理実習の内容は、どの機関に実習に行くかによって異なってくるのである。

果たして、それでは臨床心理士として必要な技能を身につけることができないという批判もあるだろう。しかし、臨床心理学的援助は対象のニーズを読み取ることから援助を組み立てていくものであり、他の対人援助職の人々と協働で援助を行っていくことを考えれば、それぞれの場に応じて求められる役割が異なることや、個人を対象とした臨床心理面接以外の場面で、臨床心理士がどのように関わることが援助的なのかを考え、学ぶことは院生が修了後に直面するであろう実態に即した実習であると考えられる。

臨床心理実習について先行研究（伊藤直文・村瀬嘉代子・塚崎百合子・片岡玲子・奥村真利子・佐保紀子・吉野美代，2001）は行われているが、先行研究の数も少なく学外の臨床心理実習でどのようなことを学んでいるかについて十分な検討がなされていないとは言えない。そこで、本研究では、例えば心理検査場面の陪席というような実習先で学んだ個別具体的な内容のみではなく、院生が実習によって何を学んだと感じているか、すなわち、院生にとって実習はどのように体験されたかについて面接調査を行う。これにより、学外の臨床心理実習により院生がどのような学びをしているか探索的に検討したい。

本論では、各領域の実習の中でも、教育臨床領域における実習について検討することとする。実習の構造についてはおよそ下記のとおりである。

実習場所：不登校児童生徒の適応指導教室

実習時期：修士課程1年後期

実習期間：約半年

事前指導：前期の実習報告会に参加

当該領域での実習経験者から引継ぎ

当該領域実習担当教員から施設の説明や事前学習の指示

当該領域実習担当教員引率の元に事前挨拶に行き、施設の実習担当者から説明を受ける

実習記録：実習中は日誌形式で毎回記録を作成し、指導を受ける

事後指導：レポートを作成し実習報告会参加

お礼状作成

実習先への謝礼：2007年9月現在の時点では学長名の実習申請書の送付のみで謝礼は支払っていない

保険加入：入学時に学生自身の傷害、及び、他人の物品、身体への傷害を補償する保険に加入

II 方法

1. 調査方法

学外での臨床心理実習を最低1箇所は終了した院生を対象に個別に付録に示す質問項目を中心に語って

もらう半構造化面接を行った。調査時期は2005年2月～2007年3月。面接時間は60分～110分。

2. 分析方法

面接は対象者の了解を得て全て録音し、逐語記録を作成した。本論では教育臨床領域での実習を行った4名の逐語記録を分析の対象とした。KJ法（川喜田，1970）を用いて逐語記録の中から、院生が臨床心理実習で学んだと感じていることが語られている箇所を抽出し、一つの意味あるまとまりごとにカードに書き落とした。続いて、カードの内容を要約したラベルを作成した。全てのラベルを集め、内容が質的に類似するラベルを一つのカテゴリーにまとめた。さらにカテゴリーの中身を良く表す見出しを作成した。結果は図2に示すとおりである。また、それぞれのカテゴリーに含まれるラベルの例を表1に示す。

III 結果と考察

文中においては、カテゴリーの順位とラベルを区別するために、便宜上、大カテゴリー []、中カテゴリー 『 』、小カテゴリー 「 」 、ラベル“ ”として表記する。

1. 『場の理解』

この中カテゴリーはさらに4つの小カテゴリーによって構成された。院生が適応指導教室の仕組み、実際に適応指導教室がどのような援助的な機能を持つのか、臨床心理士と他職種との仕事振りを学んでいることが分かる。適応指導教室は不登校の子が通う施設、連携は重要といった表面的、教科書的な理解ではなく、環境を整えることで子どもが変化するのを目の当たりにしたり、連携の難しさを見聞きすることで、より実践的な理解を深めていることが分かる。臨床心理士が仕事をしていく際に、面接場面を通じてのクライアント理解はもちろんであるが、仕事をする「場」の構造や機能の見立てが必要である。そのような場の見立てにつながる学びを行ったと考えられる。

2. 『子ども理解の広がりや深まり』

この中カテゴリーはさらに5つの小カテゴリーによって構成された。一人一人を見るということが実際にどういうことなのか、子どもの発言の裏にある気持ちなど、相手の言うことではなく言わんとしていることを理解するということがどういうことか、を体験したことがわかる。また、「対人関係の複雑さ」から集団のメンバーが入れ替わると関係性が変化することや、「子どもの成長・変化」から、関わりによって対象が変化するということが実際に感じることができていることがわかる。

これらはいずれも援助対象の理解である。子どもたちの中に、援助が必要な部分もあれば、元気でいられる部分も同時に存在していることを実感する体験となっている。個人面接の場合は、援助が必要な部分がクローズアップされることが多いが、適応指導教室という場であるからこそ、元気でいられる場面、対人交流場面を見ることができ、直接働きかけることもできるのである。

3. [臨床心理学的援助の実際]

この大カテゴリーはさらに2つの中カテゴリーによって構成された。中カテゴリーは『実践について受けた指導』、『援助の方法』であった。『実践について受けた指導』はさらに3つの小カテゴリーに、また、『援助の方法』は10の小カテゴリーによって構成された。

『実践について受けた指導』に含まれる小カテゴリー「実習生の不安の解消」では実習生として指導を受ける体験が被援助者としての体験となっていることがうかがえる。

『援助の方法』に含まれる小カテゴリー「介入の難しさ」「メリハリのある関わり」「不安を喚起しない関わり」「適切な距離感」では、実習生自身が対象者と関わり、そこに生じる相互作用を実感する体験をしていることがわかる。また、そこから働きかけに際しての微妙な加減を学んでいることがうかがえる。

「個と集団の複眼的視点」からは、集団を対象とする援助場面で集団と個人を同時並行で見ていくこと、集団の中で一人一人を大事にしていくことの難しさを体験していることがわかる。

「集団活動の組み立て方・進行」では、活動中とそれ以外の時間に対象者は同じであっても言葉遣いや関わり方が異なっていることへの気づきが見られた。

臨床心理士がクライアントを援助する形態は個人面接とは限らない。デイケアなどの集団療法場面も存在するが、大学の附属相談室での実習は個人面接が中心である。その点、適応指導教室は学校という日常とは明らかに異質であり、個別対応から集団活動まで緩やかに運営されている場である。そこでの集団活動は一見学校での活動に近いが、一人一人に目を配ることがより求められ、プログラムを通じて何かを習得させるというよりも、活動を通じて子どもの力が少しでも発揮されるように促していくことが求められる。そのよ

表1 各カテゴリーのラベル例

大カテゴリー名	中カテゴリー名	小カテゴリー名	ラベル
	場の理解	システムの理解	適応指導教室のスタッフは毎日分担して子どもたちを見ておいて学校に毎月報告書を提出する
		機能面の理解	教室で自分を抑制している子が適応指導教室ではいい表情。環境を変えることで子どもたちの力、いろんな面を引き出せると改めて感じた
		コンサルテーション	子どもについて、臨床心理士の立場からこう思う、教師の立場からこう思うという話をしているのを見聞きした
		連携の難しさ	スタッフの連携がうまくいっていると動きやすいが、うまくいかない時もあると聞いた
	子ども理解の広がり と深まり	個別性についての気づき	エネルギーを回復してきている子もいれば、エネルギーが小さい子もいた 一週間を感じさせずに関係を元通り作りなおせる子もいれば、一から出会いなおしのような形で関係を作りなおしという子もいた
		子どもの成長・変化	表情も体もがちがちだった子が、子ども同士の相互作用、臨床心理士の関わり、スタッフとのかかわりで変化していくのを体験できた
		対人関係の複雑さ	いじめに近い状況があったときに、アプローチが難しいと思った。自分の気持ち(やられた子はつらいよ)を正直に伝えたが、いじめ関係にあると思っていた子が一番親しかったり、お互いを思いやっている面があったり
		不登校の状態の理解	学校に行けないものが心の中で引っかかっていることは感じられた
			いつもニコニコして誰からも好かれてうまくやれそうな子が笑ってかわすことができず、いつも帰りに腹痛を起したりきつくなったりしていることを聞いた
			見るとすぐ元気で学校に行けるのではと思う子が、対人関係、友人関係のとりが苦手で特に同性の子とトラブルを起してしまうことがある
		子ども観の変化	子どもはかわいくないと思っていたが意外とかわいかった
臨床心理学的援助 の実際	実践について 受けた指導	プライバシーの保護	実習生の名前も苗字しか教えない、お互いの住所も秘密にしてくださいと言われた
		子どもへの対応	子どもが欠席していてもその子の席にはなるべく座らないようにアドバイスされた
		実習生の不安の解消	反省会ではスタッフ全員が活動や休み時間のことに対してコメントしてくれる 実習で気になっている点とかを聞いて、どうしたらいいかっていうディスカッション
	援助の方法	介入の難しさ	適応指導教室の子は今までの中学生への接し方だと黙り込んでしまったり、近づいてこなかったり、今までと同じじゃ駄目という印象 子どもの表情の裏にある気持ちを感じ取れないと、関わってうまくコミュニケーションができないような感じになってしまう
		メリハリのある関わり	子どもへの接し方、言い方、注意の仕方、褒め方、気づかせる方法を学んだ
		不安を喚起しない関わり	どういうふうにもその子の地雷を避けてうまいこと関わるか
		適切な距離感	一人になっている子に話しかけるときの、他のスタッフのさりげない近づき方を見て真似したりした
		つなぐ関わり 遊び	子ども同士話をできるようにつないだりできた 昼休みに遊ぶ
		信頼関係の築き上げ	実習生として、子どもとある程度信頼関係を築けた

臨床心理学的援助の実際	援助の方法	個別と集団の複眼的視点	子どもたちに同じように接するのが基本だが、気になる子を気にしながら全体を見ながらやる
			自分が活動の中心でないときは、子ども一人一人の様子を見て、子どもの視点に立って活動を進める
			集団活動の指導の役割で入っても実際に子どもと関わるときは個々に、一対一でやったり、臨床的な考えをしていくのが重要
		集団活動の組み立て方・進行 個別指導	活動中と昼休みで関わり方が違うことに気づけた 子どもの日誌にコメントをつける
臨床心理士の専門性	課題の明確化	自己の性質の見直し	対人関係で引きすぎる部分を考えていけないといけな いと反省した 思いが入りすぎるところがあり距離を自分でとってい かないといけなかった
		臨床的感性の練磨	子どもを観察して関わっていく、引きどころ、押さえな きゃいけないところなどの感性を磨かないと、と思う
	臨床心理士としての スキルや 知識を身につけたい	発達についての知識	発達について勉強しないといけないと思う
		家族支援	家庭の問題を抱えている子が多かった気がするので、 保護者との関わり方も勉強していく必要がある
		集団活動のバリエーション	活動のバリエーションを身につけたい
		アセスメント	アセスメントを子ども理解のためにも、こういう関わりが 必要という面でも勉強していきたい
	臨床心理士の仕事 の内容	終結の際の心構え	心配でも卒級式でしっかり送り出さないといけないとい う、終結を意識した。臨床心理士はこういう気持ちを感じ るのだなと思った
		適応指導教室における臨 床心理業務	臨床心理士は面接も適応指導教室の活動もしている 親でも先生でもなく、無理に学校に行くことを強要しない 立場で寄り添っていけるようになりたい
		姿勢や声かけの実際	臨床心理士が子どもに話しかけるときは、上からではな く楽しそうね、どう思うかなという声かけで、教師と違っ ていた。臨床心理士の話し方とか雰囲気をも身につけら れたらいいと思う
		連携	学校でできないことは適応指導教室に任せて、一緒に 子どもを育てるという意味でお互いに理解しあってやっ ていくことが大事だと感じた
	その他	大学附属相談室との相違	気になるときに行って、こちらから話しかけるというよ うなことも違った
		過去の援助経験との比較	教師として子どもとカウンセリング的な関係作りをやっ てきた経験に助けられた
無力感		実習生として何もしてあげられなかった	
意欲の向上		臨床心理士の資格なんか、いいかな、なぜ臨床心理士 に進んだのかと下がり気味だった気持ちが、実習を通し て、また戻ってきた感じがした	
戸惑い		指導的な役割が多いところだったので戸惑いがあった	

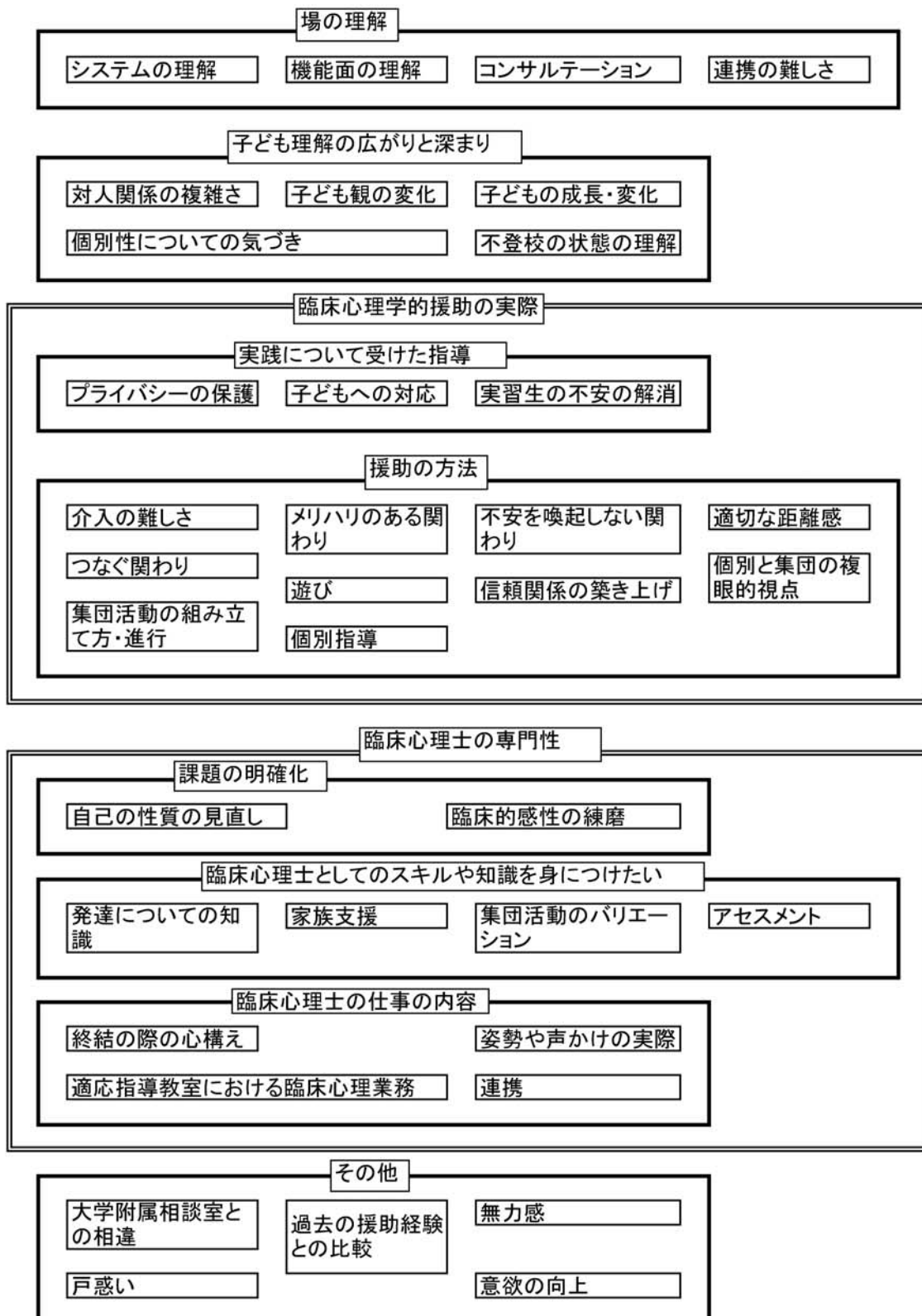


図2 教育臨床領域の実習で学んだこと

うな援助の場で働いていくには、集団内での人間関係や相互作用を見る力と、集団と個を同時に見ていく複眼的視点が必要である。適応指導教室での実習ではそのような力を身につけることの必要性を実感する体験をしていると考えられる。

4. [臨床心理士の専門性] について

この大カテゴリーはさらに3つの中カテゴリーによって構成された。中カテゴリーは、『臨床心理士の仕事の内容』、『臨床心理士としてのスキルや知識を身につけたい』、『課題の明確化』となった。

まず、『臨床心理士の仕事の内容』について述べる。ここでは、さらに4つの下位カテゴリーが抽出された。その一つは「適応指導教室における臨床心理業務」であるが、職域の概要を捉えるにあたり困惑した体験を示すラベルが複数抽出された。その背景としては、他職種と協働する形で集団の運営に携わり、その一方で同じ子どもの個別面接も担当するという現場の臨床心理士の役割の複雑さに実習生が直に触れたことが要因として挙げられていた。実習生が、臨床心理に関する知識やそれまでの学内の臨床心理実習の体験によって形成された準拠枠をもって複雑で多様な現場を参照し、困惑するという現象は、理論と実践を自分のものとして消化し統合していくプロセスにおいて、避けて通れないものといえる。その不可欠で貴重な体験をこの実習で得ているものと考えられる。

そのような職域の曖昧さの中においても、現場の臨床心理士というモデルを得ることで“親でも先生でもなく、無理に学校に行くことを強要しない立場で寄り添っていけるようになりたい”と、臨床心理業務の本質をしっかり捉え、臨床心理職のあり方を学んでいることがわかった。それに関連して、実習生は、子どもに接する「姿勢や声かけの実際」として、臨床心理士独特のかかわり方についても自分の目で見て、耳で聴いて確かめていた。

これは教育領域に特徴的であった学びといえるが、進級という区切りが存在する場面（卒級式・退級式）に遭遇することにより、学内の臨床心理実習では到達がなかなか難しい終結を疑似体験し「終結の際の心構え」についても感じ取ることができていた。

さらに、指導員と臨床心理士がどのように役割分担し「連携」を保つかということに関して、共に子どもを育てるという目標のもとで理解しあうことの重要性についてのラベルを見出すことができた。

上記の業務内容等を踏まえた後、その時点で自分に不足しているために、今後『臨床心理士としてのスキルや知識を身につけたい』こととしては、「発達についての知識」、「集団活動のバリエーション」、「家族支援」「アセスメント」であるという結果を得た。適応指導教室、あるいは、家族という集団をいかに支援していけるのかという問題意識が高まった反面、個人面接のスキルアップという類のラベルは見出せなかった。

『課題の明確化』は、2つの下位カテゴリーで構成された。そのうちの「自己の性質の見直し」は、自らの対人関係についての気付きを得たという内容で占められた。実習生が対象者と出会い、自分と向き合ったときのテーマが全て対人関係であったことはこの教育領域の学びの特徴といえる。このことと、対象者である不登校の子どもの多くが、家族や友人との対人関係の悩みを抱えていることとは、無関係ではあるまい。

「臨床的感性の練磨」については、代表ラベルに示すように、子どもに引きずられることのないよう自分を保ち感じていくセンスが求められると体験していた。

5. 『その他』 について

『その他』とするまとまりが編成された。そこは5つの下位カテゴリーで構成されることとなった。代表ラベルにあるような実習生として何もしてあげられない「無力感」、あるいは、先に述べた職域の概要が初学者には捉えにくい構造であることに関連するおぼつかなさや「戸惑い」が体験された。さらには、実習で楽しさを感じ、実習前に持っていた進路に関する迷いが払拭され、臨床心理士を志望する前向き的心境に変化したという、学ぶ「意欲の向上」につながったラベルも見出された。

「過去の援助経験との比較」では、学校での援助の経験が、今般の実習を行う上で、役に立ったという意味合いのラベルが目立った。

「大学附属相談室との相違」として、気になるときに支援者から近づくことが可能であること、対象者の人数が1人でなく複数であることなど、極めて具体的な治療構造の差異についての気づきを中心であった。

IV 今後の課題

教育臨床領域の実習時期は、多くの学生が修士1年の後期に行っている。そのため臨床経験が比較的浅い時期であるにもかかわらず、この外部の教育領域の臨床心理実習において、実習生は実に多くのことを感じ、

そして学びとっていることが、この調査で明らかになった。引き続き、実習生は、福祉・医療という諸領域の外部臨床心理実習での学びを積み重ねていく。それら領域と、本実習での学びの順序性や、関連性についての検討については、今後の課題となろう。

謝辞

お忙しい中実習生を御指導下さっている関係機関の皆様方に深謝申し上げます。
また、面接調査にご協力下さった院生の皆さんに感謝致します。

引用文献

心理臨床学研究, Vol. 19, 特別号, 2001.

日本臨床心理士資格認定協会 2006 平成 18 年度 臨床心理士関係例規集, 25-29.

日本臨床心理士会 2006 第 4 回「臨床心理士の動向ならびに意識調査」報告書

伊藤直文・村瀬嘉代子・塚崎百合子・片岡玲子・奥村真利子・佐保紀子・吉野美代, 2001, 心理臨床実習の現状と課題, 心理臨床学研究, Vol. 19, No 1.

川喜田二郎 1970 続・発想法 中公新書

付録 面接調査内容

<確認項目>

・実習領域・教育臨床・病院臨床(精神科/心療内科/小児科)・福祉

・実習の頻度

・臨床心理士との交流の頻度

・クライアントの年齢層

・クライアントの病理水準

・対象者のこれまでの対人援助の経験(教育実習等のそのほかの実習や, ボランティア, アルバイト, 就労経験も含む)

<インタビュー項目>

・臨床心理実習はどうでしたか。

・実習先の決定についての経緯について, どのように決定され, それはあなたにとってどうでしたか。

・臨床心理士という職業について感じたことはどのようなことですか実習前・実習後で変化があればそれも教えてください。

・クライアント観(利用者等に置き換えても可)について実習を通して感じたことはどのようなことですか。実習前・実習後で変化があればそれも教えてください。

・実習を通してどのようなことを学びましたか。

○心理面接(個人・集団)

○心理アセスメント

○倫理

○コンサルテーション

○多職種との連携

・自分にとって実習の成果と課題はなんですか。

・実習で困ったことはありましたか。

・実習先の現場に, 臨床心理士の立場で立つとしたら, どんな感じがしますか。そのためには今後どのようなことを身につけたいと思いますか。

・実習先の現場のクライアントの立場に立つとしたらどんな感じがしますか。クライアントの立場に立つとして, 今後, 臨床心理士としてどのようなことを身につけたいと思いますか。

・クライアントに対して, 臨床心理の実習生としてどのようなことが出来たと思いますか。

・相談室での活動や, 陪席体験との違いを教えてください。

・教育実習や介護実習に行かれた経験のある人は, 教育実習との違いについて感じていることを教えてください。

・理想的な実習とはどのようなものだと思いますか。(実習のプログラム・内容・実習先の構成員・期間・日数等)

・臨床心理実習についての要望があれば教えてください。